

薰蕕錄

知



曾
775
33

薰菴錄卷之八

目錄

島津家傳

薩摩兵亂記

道灌落記

太田傳

水野清久傳記



養猶祿卷之四十五

中村直道輯



治津家傳

一 養猶太守治津氏其祖人皇八十二代後白河院御宇
 源二位賴朝々治世の時建久四年治津村宿源忠久は
 薩摩吉備職と賜ふ同二年は六年と三年と忠久
 土京と勤く玉中の事と知くもいふは中河次郎未
 と云者も養猶より一 四内よりを監やしむ日七年
 中河上治して忠久とむくへて依り相もふ薩勤一
 入部やしむ先お水のみと云妙の者もたを角くしり
 玉中より後いざり考らむと後命ときうす治津より後
 中河の族より仁礼と云考志布もくふ妙あり者割
 柳して十知とあすも付らねどもよりおふと云

梅小と母一と介彦下大隅日向平助と若夫と次子
可治の也口教書と下一りふ取梅小行付小宗と云
こもくつ大友宗子の後流として仁礼と云も親戚也
ふりつと忠久ハ口教書の中ハ似せ仁礼と神と姑女不順
山渡と区澤一河ハ二勅の大旨と成其切甚大也海
公治も在位すをより高地と代ハ正和と云じ忠久ハ
二人の子ハ姑男修理大輔忠吉種名号二男月信も忠治
三男忠重も号して忠吉子七人あり一男忠次号山二男
忠久も久治法名号忠久忠安久時忠治号也是
者家くと云名子孫と介ハ所謂河原谷森入町由
伊集院也久治の子大隅も忠宗法名号忠宗も忠吉法名号
忠宗ハ七子あり一男上徳女貞久法名号二男忠氏法名号

三男忠光法名号四男時久法名号新六男助久法名号六男助忠
七男久安法名号上徳女貞子六人あり姑男秋久法名号
上二男宗久三男忠久四男氏久法名号以人三男貞久
高家と忠治と云名油氏久氏と云久氏二子あり陸奥
与元久法名号世理と云久豊法名号元久三子と云久久
福昌寺三代目の後持と云一と云家也治と云名久と云
也つりつ久久豊と日判の任人伊集院と云名久と云
もも治治と云久日向の任人信と云名と云治と云名久
藩屏と云文昭の任人也久と云名あり陸奥も忠
國法名号以時伊集院と云ひと二男持久法名号三男
忠久も末久法名号四男出羽も有久也物取八幡の足
祖と云男伯耆も豊久法名号陸奥も忠重と云子十二人

何れも皆友久カセタ日新ニシ之祖也二男法興ホウキウ三久
法名号山内市本と知れり其子久利勝久清久忠法
親久ホシ成福昌寺廣命寺ホの位持成あり其久
の子隆興忠政法名号 用室其子久隆興忠春法名号 蘭室
二男信理信名号忠信三男信理信名号又時久法名号 大魚三子
兄弟たご後につく比ガセタ友久ハ高野の臨流
りりし云丸康勝うりうりてう家督お継ぐ別家と
まて流り其子お徳忠幸法名号 天推 海氏忠幸の三男新
成と号れ其子久隆興と号久法名号 大牛白推二男大ら次
政久メクリと云布して初れも三男又市尚久信名号之友
隆興と号久童名虎赤丸と云一母勝久と童名は雲
赤丸と一母て隆興の次子と成市より總次親御と名

小人がびき後ふ父の日新亦ハ別の一節とて古と云ハ
成初らす高久の子ヤ人ハ信理を補成久二男共彦次
忠平三男を阿を補利久四男中哲を補成久也政久ハ
子と云ら次幸久と云尚久うると高書ハ忠成と号て
一門連続して家族也

一治洋村友忠久より信理を又義久より初と十六代も流り
家業ハなびきして三男あ栗也上古と事法ハ信
家久義久友人カと為小主城して薩那の右与と
祐ハ赤物也いハ和討一合戦を後命一申も大
永ハ法申田集大獨取知初一清水ハ主宅すハ
弟と云者押わけ日向山と知初す目久利お根上井
と云者赤申と不和也信一合戦ハ月久申白

おろり四年一月方佐佐木頼朝のけいおす浦上の一
族に藩士より攻るを先と攻む時實利より
勝るゝか勢一久お討降すは、治平二年丁卯月
十の辰陳と攻あす浦上を城して混谷にひくそ
よりな是あめもちもの知り成るは京氏病死
して一つ皆あつくよ成ゆる日向の伊弉入たは治平
て又流別よ款討むむ者んよあぶ

へ日向の伊東氏に右大将家の頼朝と右左衛門尉助朝が代
るは流伊弉入を討つ時頼朝は右左衛門尉の治平建武
四年丁丑卯月の辰始て中出兵別より日向國下向す
頼朝より五代大和守頼光の討よむて日向守人佐藤
三宅高平のあく十二日の款と討滅す討よ文明

十二年庚子の年し曰十七年寅卯より頼光病死七十七歳
曰年三月より頼光の嫡子頼朝全才頼朝おたはた
区治して縣表（お疎）と攻るとま（大款）と小
元治より依ては兵凱陳也はしは教於形（内城）
任肥入の物也一依て京大務源と表七浦（おと）
頼朝清武より表、この系の内給る府（お城）をひ勢
城まといひて金銀、月より伊弉治利とわ款百人と
討よあ教お（区）ははも曰今三月頼朝楠原お討す
曰六月とまはれは流別と大勢酒谷（お島）を教
と討く（お）して頼朝おてもお兵も勢とて先と相
闘ふ頼朝は頼朝お討すは、政記す二十八歳を子大
和守頼朝を子大和守頼朝と号す今の二任入たの是と

我祐元年任肥もたぐ 祐出頭ありのとき合よまひ又も合
法也言のいふゆゑも家集の所日柱と記入す事遺恨也
しつた又十年十月より十年正月に逃散す 新地を
あてまぬす日十二年正月より祐元馬帽子取す法也
日十二年三月廿九日水尾は法也一ある 薩土合のり鬼
城と云城の種一軍勢あり入まけりて日向惣取も水尾
地許て鬼城の攻薩土智城の定て置く 日十五年高
岳山陣も日十六年中尾薩土日年十月十日の法津
方の要害馬野城の攻落し 日十七年井手尾城の
法也日十八年二月廿日井手尾城下をたぐ合戦も
日卯月への法津勢押寄せ井手の城と攻落すけし時
長祐の味方惣家却^{カウレ}味方の城を伊予法也を^{カウレ}も

介福津部は島 薩土の攻落す討死に傷り初この城に
掛ひ法津悉くおぬ日返日卯年七月伊予鬼城を
本初越あるとたむし 法也加治田と法津日卯月あり
法津と介城日井新山と高城と攻落し 知事合和と
伊地知伊作と高田法也と好の教才人討死すは高尾
和隆とて山と日卯年法津伊作とるの^{カウレ}も 五ひ合
戦とてかこ

一 永保六年と法津と高尾軍兵と年 陽刻向刻
進發す火攻也と云ふは法也と高尾川と云城を伊予
の^{カウレ}の^{カウレ}より法也と高尾川と云城を伊予
高尾土原地と高尾と高尾川と云城を伊予
高尾川と云城を伊予と高尾川と云城を伊予と

著野篁地蔵明く成るる酒谷の家傳事す此城
中と抄もてふかき後地となりしを打毀て
下大隅の山津一牛根あふま水と介り大隅も
打こりしは行舟伊予程川乗りて從りし地盤
行舟の角に礼澄の舟を故幣の家として置別勢
押言請けし伊板氏のたとと鋒楯也

鳴津家傳一終

鳴津家傳二

伊予入江平義祐天文拾年と考任肥前弓矢始りより
永禄十一年の乙酉二十八歳或は合戦一或は和睦一年
月を送る故祐死すはは家のも末となり是時討害
初日よ永禄十一年七月十日の婦子及事更成増早也
生年少く永禄十一年八月十日の婦子及事更成増早也
社以りて年と父義祐思ひし人なりしは依てゆ
ある者としりし果ありて天符なりしと云

一 元禄二年夏伊予久米郡に於て鳴津家傳事す此城
中一貞章加久後押分作友等と出向ひ勝地をかか
のち、南方打掃伊板の節日かきし介宗後、曾兵
官人と討北日向流気と失ひ伊予し居城地月大と證切す

飛つて不知加と見と流く夕雲をこきち義兵久遠と云
大軍と後一因小作去来と流と云外共在の忠平
右より幸久未落陽方國一軍共十万人より一佐去来
却却賊敵も亦入流と後日十月十日より流より目白城と
押して十より卯刻大友治休互に勝負と事一幸一未
乃ふし終に兵存以たる以あわると死て欲法に流入津
又死と云れて事一をいけり城の中勢去桐家久門と
穿て打てぬる大友双方に欲し高し知く軍兵一致し
力尽し欲法亦法勢敗軍より一津津流し事一と平川
と流に七里と流に河大友氏に士卒は討つ九二万余人
津津大よ防と威と回し招し一落陽向と流し高し一功と
しり一入程を肥筑と六列大友と心と事一此大友敗法夜軍

のりとしりして六ヶ國の共々分とくしり物中肥筑と隈本と
城冠者と云者肥田流し河尻と云大友の流内と押しす
依し回國し一揆号隈本と城一押分と云城冠者一致し
亦招て事一と流別一城系と津津流と許法一鎌田
尾津と入た報西と入殺と流し舟と事一隈本と城一加徳と
入又田と云去他流と事一流し舟と津津と流す流しと
今の時としりしと流しと事一流しと幕下と事一
是と津津と一威風九品と流し
一肥田國人がし流別と流しと云大友流と事一
トと流と事一知中と事一佐治と事一言房と事一八代の城と事
此方の一字と流し義羽と改名と流しと事一今年大友流日向衣
尾津と事一と事一帝大と表と事一と事一城と事一新納と事一

大口とち飛ら攻く事ふ計足合しう内日向坂合戦
信濃信利と信濃信元とにさうし肥後守大守信元
るんどく川合て信濃(信元)信元と云々七年正月十日新納武
能ちあ地軍士三千余騎を信元と共河内ノ冬思攻り是
と攻瑞と又若守光と云々城郭と推し西城と堅守しち
ちむおるは鉢桶乃及爪袋と始り日年の冬矢修り城
より兵とち一守云隈中(通路)と塞し何候恒亦(一味
すしりやとすし新納武能と信元信元と兵と押(押)して
十月十日是と攻あり願て方回加保城三百丁と云云竹具
換ふ

一 天正八年八月太守義久云八代守相良義陽の曲者
先代守より及びすとも自山守と故に何後矢と放し菱刈と

攻り割る傍より欲とる一今又日向表し合戦も隣町と
し大加勢より及びす割(真幸菱刈)心と若(商家)と何い
わし物より喜お候なり今及七瀬(發向)しておる
可(区)治と玉津の場と扱(十)万の軍兵と率してちち
自ら肥後進發して水俣より大津之先跡ハ鐵砲の尾
色と後をなげ忠平(同)新納武能と云々大津ハ
ちち(真幸久)のり石尾と云々の大津樫山則久扱向
太ちハ血水の本津と居り大津城郭と春そ是と攻能
中(の)ちのめ一八代(若)向ち信元不守(勇)士防戦の
術も守も信元(信元)義元(信元)志来(忠)つて御(家)替て
一陣とあすまは信濃(信元)の法保(信元)下して御(家)替
つき水俣(水俣)湯浦(湯浦)一旅(旅)信元(信元)の御(家)替つて

白より又人おぼし一曰くヒラクシノ城を攻めりて彼城陸信ノ
味方なり。信てるりこれたき者と謂て与肥ちり。方人
たり故り。功なり。く。薩兵先か。ぬ。日。十。年。
麦。此。有。鳥。書。勢。信。信。て。新。納。武。就。ち。子。形。勢。相
并。河。上。上。軍。免。り。と。始。め。宗。信。者。大。五。三。方。加。藤。と。て
杉。向。山。田。出。津。江。信。宗。と。云。信。未。犯。お。の。味。方。と。て。薩
州。一。不。順。信。津。勢。安。住。と。云。ある。と。う。す。日。二。月。十。五。日。新。納。判。別
を。海。津。江。の。陣。押。せ。攻。め。妙。の。術。の。有。り。討。死。す。此。久。文
敏。一。達。一。り。り。の。信。て。皆。人。惜。く。

一 天正十二年春、津江信宗が居る所へ、ある軍兵と率へて肥
後へ出で、中津の信志を討ち、此と謂へる。白老の
中野が捕家久、父子信津又、弟、曰、尚、書、以、新、納、武、就、

山田新介川上た、京、危、平、の、為、信、宗、は、亦、有、余、勢、汝、海、せ、し、心
安、く、於、く、信、久、人、を、馳、驅、り、三、子、余、信、津、勢、の、兵、其、の、上
江、の、名、を、一、ま、津、江、一、海、り、安、住、と、入、一、名、と、せ、也、時
原、押、せ、攻、め、り、名、を、信、の、肥、の、中、に、け、り、信、て、山、城、と
信、信、之、將、の、信、津、海、路、を、討、て、信、勢、と、以、て、招、き、津、の、先、と
率、て、一、て、多、勢、と、率、一、と、打、破、し、ん、日、と、取、す、と、中
の、軍、士、を、信、一、取、合、三、の、あ、み、の、率、ひ、て、三、月、廿、九、日、信、宗、の
い、所、を、中、野、を、圍、り、つ、つ、三、子、余、人、を、れ、し、先、の、り、り、の、は、し
と、云、一、久、久、圍、れ、り、信、て、死、す、一、定、て、日、り、在、野、別
所、遣、り、が、陣、に、返、り、し、と、大、一、親、の、信、信、大、軍、行、り、と、云、一、大
打、負、の、方、(彼、を、と、信、津、勢、と、云、て、三、江、と、云、と、討、つ、八、百
人、討、た、れ、信、信、と、信、宗、と、云、り、も、牧、軍、と、云、り、も、十、名、を、加、ら、れ、と

運電一けりぬ治津ノ属して肥後ノ信一任と位々宗
運一社とハお物と道則或云云と云二男家督と有り四年
の秋よりしてお物とを別け分る所去る年一と八月
十日の山と攻落し治津ノ属見物(す)おれの大寺焼つて
数方の軍士と殺之治津肥後(礼)入して八代ノ名津す
日室八月十日限大足御て款二百余人と討口十
階田方の勿れと攻めり位々河内民が方僻易一と日
すあり二軍本山津敷ノ城郭たより区敷と限ノ名城も
防戦ノ船も失ハ十城一と敵劫(礼)入す河内大寺司
あど知れぬバ塔をて治津ノ方ハ治津ノ治津ノ幕下
なり又小代冠者も先年吉松津ノ河野心半ありつと
三女と知れぬと云々肥後ノ八罪村道ノ城と云ひて

あり又限於限府ノ多御も先年吉松津ノ府城も相々
御流ありと云々治津ノ属ノ御流ありと云々御流あり
一統して治津ノ知れぬと云々肥後ノ中ノ家と云つて
薩州ノ属と

一筑おし國筑治上野ノ藤原廣門ハ号氏也ノ河内者也
古渡あり一太宰小戴杜高ノ流流なり

平格ニ系馬ニハ小戴一族武藤 前ノ薩州(禮)入りつと云々
駿河守正門カ後流 入つと云々

と云々豊後ノ方人ノ成りたり天正五年六月筑紫
運治一と云々進交ありと云々肥後ノ代ノ者傳也治津書
以徳長伴集治書ノ更志棟と云々一太宰と云々河内
古渡別流と云々山ノ中ノ日十月六日取ノ城ノ築あり
同り一日取ノ中ノ日取ノ城ノ築あり上野ノ物也

敵す宝満城ハ後迄外城也是と結少人より此城共其
敷く可成秋日國ノ岩屋ノ城ニ言傳征震と云大友ガ
家臣西一ノ勇士宝満ノ加勢ノ入主藤原一城ニ言傳津
勢中と切て板敷と云結謀と云云一と云一宝満と巻のく
一と武家天面ヲ嶽一陸路一日本ノ岩屋ノ城ハ此也
攻一申多ノ目ノ秋月言傳ハ元月言傳ハ此也加
本おも國より城井長井三言全津池まで津津ノ属と結謀
政家ノ旗中ノ約束ありとい大友と下知と交り一と云一
付く事して結三子ノ兵と云一と云一城を攻む目ノ東
那原ノ筑波ノ岩屋岩屋ノ城大ノ集り加り本はノ印ハ
八河津津ノ属するが故ニ其津山野ノ一門ノ言傳津津と
牛ノ指を致す共いとい一と云一事一と云一て牛ノ指を

日本ノ産兵終ノ岩屋ノ城ハ結運城死す歳四十二
其介雄士八百余人死宝満ノ城共ハ結運討死と云一
城と定ひて逃死す三死をたす結運ハ結運ノ城と云一
死ノ戸次道雪ガ孝子ノ故て三死の城と云一結運忠長
忠棟是と攻むと云一評定ノ城と云一故と云一故と云一津
結中ノ故ノ城と云一何れも一と云一師と云一返方ノ結
加りノ方おもれ別家屋宝満ノ城と云一秋月ノ故と云一津と
拂ふ後迄廣門言傳山一と云一見女ノ人質と云一故一
肥後一と云一城と云一定り故ノ産別津津池ノ城と云一廣
門又津津一と云一産城朝日嶽一故ノ津津池と云一大友ノ
是と結三ノ故一と云一本ノ勝利と云一て馬と云一と云一
一と云一正十四年十月上旬を本ノ後大友は氣多義統と

攻めんとす者義久に討つる甲兵を平して進發あり日
白表（ハカチ目）も南々方打入中陳ハ概見
あり先陳中誓を捕家久ありと云ふ三江ハ肥後
少ハ三尾山志平交向し元年春松津ハ
大古（春子）も政名して義弘も号ハ義久小実子
なきが故（日向高部）の入田氏志ハ松津（内通）志賀
既壁入也落別も侯して古古（出勢）と結口安了家久
么と世あり城と攻めすも次も別入田氏館（宿）宿
松尾馬嶽も城と守りて防戦も及ぶすも次（宗）も
落十勝守も守りてツムカシ又押寄妙（城）戸次源
三城と後して区敷も圍も志賀も城も（係）一
と狀して之を病と号して来す白根志賀洞雲
秋ハ味方ハ屬も一侯氏城と捧てり（海）滑滝
も与城ハ後（守）りも依て攻めす（朽）烟の城も（旗）下
障り（縮）形も城も（守）りも（利）光の城も（分）陳と（権）
家久も（守）りも（三）江と（知）りも（松）津と（集）ひ（極）して
大友氏も（守）りも（三）江と（知）りも（松）津と（集）ひ（極）して

幕運の最り申上洛して幕下を云とすひて
右と怒て敗れ去りて上洛すべしと云ふも
ふて及しては後分若くは人殺りて城井氏
世相氏秋月氏方徳氏とていふ事一 敵兵の討つて
中勢を捕家久と大ねして而も城と拵る日向肥前
あねらうをなほし 礼入す家久の初り利光の城あり
泣きは敵あも去る我れは存ち大友男府内へ上京し
陣と張て清津の勢を討り日向十月十日ふて松石長
身取の利光の城（押向中勢を捕二百人と云）して
其公女と争ふ妙なる勢打負て長官我れ信親討死して
介曾七千余人命と損し 沙兵四方の牧を占め 仙石ハ
進まり大友の府内へ進入 義久捕りて府内へ兵を進

む大友防くよふ及言傍城に落家久存内へ城を築けり
と妙は義統を傍りゆゆ半ふ付城を築て沈むと云ふ
亦中勢を捕武威と拵る去るは義法肥後日向押
入り折調主法を力にせしむる志望も後大友の方へ
有らん其玖珠志く若大願し義十勢は信長は川上
河田の納言をそと野上あぬは長根氏も皆清津の
陣を破りて少少山室回くは方へ馬へ下りた城を不
信く義法元年一 翌年二月下旬押寄りて城を破り
折れし和をいふ

一毛利右衛門左衛門三浦多存女三刀谷淳正桂を殺す捕り
余人をあま門司の城へ押寄り小倉の城と攻め城を掃津
足羽集 一本掃津 百人城とて毛利が兵を殺す秋月

高橋助之助ありて兵と交わり毛利勢敗れし時元付日と
し後吉川小早川を頼り教方の軍兵と率して豊前國
小倉者(波海)一揆者楠菟らふふ山の城を攻落す高
倉小早川より一ひあて目黒守兵隊の津向原より嶽野
と南畑より一揆者を掃蕩せしめて川野より高倉より
高倉の嶽とあて一揆者を掃蕩せしめて川野より高倉
二嶽三嶽を三つとあて一嶽より高倉入る嶽
攻口也城兵よりめとて還兵をまじり思念も是以
嶽の城兵因事して三嶽津より彼一嶽二嶽向嶽と
ありて攻く故も毛利氏和平に入ら高橋助之助と計り許諾
し秀吉と下城す仙石の敗軍の時より早鳥とちり
池で津津常言と打候り高橋助之助を告秀吉も怒りせ

おの義久大友と和睦せし君臣の城と扱をなす地御の象
高橋よりとて下城す仙石の敗軍の時より早鳥とちり
任親と河津も也根籍ありとくお馬とか一高橋氏連治
てとて軍兵とて集りて高倉とあて一嶽二嶽向嶽と
高橋と津海をよりとて高倉とあて一嶽二嶽向嶽と
ありとて一秀吉も毛利が許し候せしめて許し候り
なり

一 天三十五年三月秀吉も高橋助之助を征伐しして軍兵三十万
騎と率し一京都と市立あつて高橋も津海向らとすて
先登長門の函赤岩の関よりとりて高橋助之助を
掃蕩せしめて九品と下城す高橋とあて一嶽二嶽向嶽と
高橋の者ハ水とく高橋とあて一嶽二嶽向嶽と

少く又舟より少くして其の一に浮きあがり夫の代に六年寺小
の細うが城と城と守りて流しに城水川日中城に限
城も人質と就して流しに平佐城に柱氏と志り
防戦とす位に扱入に城と人胆に別れ歌と歌合
は方日向表に守りより味方必怖とす事勢が歌
依と系に乳入して元流す歌の味と守りて流しに高方源流
皆尽して義弘の求たてし難況想り有り位に依て貞孝
内陳あり古古に城の中人汗より流しより入中務を擁
家久治然と穢と古の治人として秀吉より属と高方
漱七既と抄り

一 藤原の古古に家久流子治り内府の如く上下初礼因縁して
命とす事不知と文とす事及骨と骨と流し代と士も悉く

流し代と宗徳の氏族の居城と流し自害と企つ位に古古
と習い流し事と穢と古古に一家区持日と石とす事
古古皆尽して集流大馬依忠持とて秀吉の如く流系
と古と流し秀吉と流し流しと古と流しと穢免義久判
断して古と流しと流しと古と流しと穢と秀吉
二流して流しと流しと流しと古と流しと穢と流し
之介流子義弘佐久家久家久の内流流平の内流流
初と古古流子流しと流しと流しと流しと流しと流し
夫の流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
既と事流して流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
流子と流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し
取ると流しと流しと流しと流しと流しと流しと流しと流し

八代ノ葦原ヲ修武系以因介トシ上京ハ修武官成女ノ
尺ノ邊トナリ今友一揆始ルル修武ノ名存行ノ及ニテ大
善寺云々ハ修武ノ故城有善寺ト修武云々ハ肥後半國
切友修武ト云修武ト云ハ西播磨ト云長ノ京乃リ九州
故也善ノ善年ノ故也

尚書家傳三卷

千叶文政六年庚子月十三日石室左那園回村寫之 中村直道

葦原錄卷之四十五

葦原錄卷之四十五

中村直道輯

薩摩共亂記上下目錄

- 一 秋月吉松葦原立苑事
- 一 岩谷落城分室浦城没落事
- 一 勝尾城責日流築晴門討死事
- 一 高島左城陥事
- 一 唐門遺塚事
- 一 秀吉公薨落津進察事

目錄終

此年、川上左京卿と名乗て、浪合火船と稱し、秋ひつ、徳義
相別の全敵、松州の威威、毒り、徳つ、れ、力、は、さ、れ、川上
を、も、ど、つ、れ、る、大、將、く、り、り、方、今、は、誰、と、り、思、ふ、ま、
ら、公、に、討、死、す、く、て、秋、身、大、に、攻、陣、り、中、海、(入、り、り、の、中、
海、の、方、を、も、ど、つ、れ、る、火、船、の、子、秋、方、ら、く、と、大、の、中、は、お、入、く、
矣、ま、焦、れ、て、死、す、り、り、初、め、徳、義、の、は、り、り、は、り、殺、傷、一、日、お、送、り、て、海
城、一、り、も、ど、若、谷、の、陣、は、薩、上、勢、魚、内、城、と、大、上、り、や、う、て
攻、陣、一、内、方、と、う、徳、義、の、補、陣、と、は、さ、り、り、り、り、後、は、死、陣
と、う、方、(送、り、陣、一、り、と、も、ば、一、)

上段

薩摩共乱記下

勝尾城責討、統宗、晴門、討死事

其後、信津中務、秋月、帯、した、統宗、赤、介、唐、門、が、勝、尾、岩、と、攻、め、
り、り、り、城、中、と、云、と、音、聞、て、防、き、り、れ、大、勢、は、雲、野、時、分、く、て、夜、に、
赤、介、の、る、統宗、晴門、川、上、左、京、と、浪、合、て、殺、ひ、り、り、左、京、為、り、と、云、
る、人、一、是、の、方、以、く、け、たり、也、り、

お、介、よ、左、刀、の、下、に、も、産、屋、の、と、思、切、く、れ、先、を、控、禦、

晴門、死、事、也、

切、ら、は、き、れ、又、ふ、く、る、物、も、れ、一、切、れ、也、形、を、り、れ、也、

そ、う、く、控、て、中、に、お、介、り、り、双、子、お、打、り、く、て、左、京、が、左、刀、晴、門、に、控、し、
高、て、双、子、の、倒、れ、り、り、成、形、と、そ、れ、を、り、り、け、り、川、上、左、京、忠、義、を、
信、津、一、族、の、内、に、と、大、剛、士、双、の、勇、士、あり、見、守、り、信、と、方、の、勇、士、な、

逆後弓下りて丹軍にせしは若し城守のまゝに城守に成りし
ふと城守に成りしは若し城守のまゝに城守に成りし
中勢より成りしは若し城守のまゝに城守に成りし
去来若し城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
兵力と費して成りしは若し城守のまゝに城守に成りし
と構へ上方勢に成りしは若し城守のまゝに城守に成りし
りり城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
昔より今も城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
勢より今も城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
をいまして今も城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
たふして今も城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
三左衛門と成りしは若し城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし

作らば城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
吉と成りしは若し城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
おまけに城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
西より城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
流しに城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
武門のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
父のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
母と成りしは若し城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
秋守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし
せと成りしは若し城守のまゝに城守のまゝに城守のまゝに城守に成りし

周云且也遺行以貴人の夷齊、節、梓、白、程、嬰、が忠、以、意
と云ん、人、過、不及、の、誤、あり、と、上、に、以、れ、り、一、周、以、ち、る、罪
を、く、れ、り、人、抑、り、り、叙、の、昔、と、侍、す、一、天、照、太、神、遍、く
世、と、あり、れ、み、な、す、一、支、茅、茨、不、剪、采、椽、削、り、ぬ、智、代、の
超、四、岳、の、民、征、と、歎、き、一、世、も、未、だ、き、ぬ、且、澤、美、哉
一、海、と、く、神、道、と、以、て、王、室、の、助、一、一、兼、統、の、政、と、一、を
一、一、聖、徳、太、子、初、て、異、端、の、法、と、貴、人、の、賢、臣、に、教、を、の、た、
叙、教、れ、一、一、佛、法、世、に、ひ、ら、け、り、次、才、は、王、室、衰、微、し、
鳥、羽、白、川、の、二、帝、一、至、と、終、一、一、武、家、の、ま、り、小、世、以、ち、集、め、
ぬ、早、失、蘭、才、乃、軍、は、彼、佛、法、と、云、貴、き、と、あり、一、一、知、り、
一、何、ぞ、王、位、叙、ぬ、と、い、ひ、と、是、と、言、宗、一、一、流、す、ま、の、あり、
一、一、伊、勢、乃、信、以、難、行、と、い、え、ば、な、ら、う、佛、法、の、不、善、成

事、と、云、一、一、と、ん、の、力、を、一、一、歌、り、一、一、と、ら、う、一、一、深、に、於、て、不、以
治、と、より、武、家、お、終、と、世、以、ち、小、宗、泰、附、也、匡、一、一、と、信、徒
と、毫、一、一、と、り、一、一、書、と、讀、て、未、く、一、一、切、以、ち、聖、賢、の、遺、書、と
見、道、徳、の、一、一、語、以、ち、行、か、一、一、叶、ひ、れ、ば、國、家、能、治、り、一、一、
高、附、と、云、一、一、乃、く、注、書、一、一、悪、毒、一、一、と、家、亡、ぶ、後、醍、醐、帝、も
國、民、を、み、治、ら、ず、兵、を、一、一、と、言、民、が、乃、く、一、一、武、家、奪、れ、り、一、一、
尊、氏、も、武、家、治、り、を、一、一、と、い、一、一、逆、賊、卷、了、満、く、開、神、の、聲
止、所、を、一、一、と、云、一、一、其、作、也、や、松、待、り、と、ん、今、ま、り、と、是、利、の、世
たり、昔、日、國、賊、高、師、也、が、家、人、踏、踏、し、一、一、隱、遁、の、儀、法、と、禱
一、一、書、と、い、一、一、は、武、家、と、名、付、け、日、霖、雨、以、後、一、一、是、と、云、
其、意、激、し、一、一、と、君、子、の、度、一、一、と、い、一、一、終、と、其、志、の、發、す、る、所、又
後、一、一、寸、陰、と、抑、一、一、む、と、聖、人、の、意、を、れ、ば、及、ぬ、也、と、一、一、と、あり、す

後、疾く一は紙紙人より世人の怨讐をなする人あり成去
集る人後、然と志のぶ母もちの道とと去持ふものありし
天開く地始り人生す言わりのを陰陽の道違わうも
常におおれ判し天の宗と神と云地の宗と鬼と云よ有と
陽として君として下も有る陰として臣として下として
以て恋とりの古く日本の大法は皆神道也とて直き身心
以神道とす天地の宗貨と交をれ人なれば天理地道と
すら有べし

天照太神の万民を教ひしや人の天地の産し神徳をると言ふは日月
之澤と見え心と見え道と耳と不浄とすて心と不浄と不浄と
臭く心と不浄と不浄とすて心と不浄と不浄と不浄と
觸く心と不浄と不浄とすて心と不浄と不浄と不浄と

教貴婦の於余り有る事とや霊と天あり地あり人
あり魔附を脱して悪も婦も教付る家として害大也
君として君と魔とを弟氏を憐み政道以てくすね有
はして君と魔とを弟氏を憐み政道以てくすね有
わけを教く孝とをび人の愛と願ず道は邪とをれとて盡
忽ち是と發すり也人の悪むい死の道理よわて悪ま方を
君子也夫齊り祝ておす楠正成の時と見て討死するを道理以
ち教付る人の道理よけりぬい禽獸も相同し生たをうして
道よけりぬい聖人をうん言て悪は道は賢人也今世は
賢人もれい悪辯人善人とやせん今世は良人の賊はと孟
子も禁めしやとや実歎くも可有余

君臣父子夫婦兄弟朋友の交とてき人といは交けりて禽

天地の間を遊ばぬ人なれば天地の神も我も人として人を害
するもよしするも左右のよしをたてて切りたてたを切ぎ
きりて天地のちよ悪氣あり人中の悪人ありその悪人と教へ世と
治る病を療となし身と健よきなりとて君子を力たす事
とてさうして取寄る治る言のたよはるなり論うよきなりねも今の
業あり世を治る恨よりして料なきひとと害へはしてきて思ひ
しれお別と怒りぬくも是日本のこゝありす文字並行の
是れぞも礼に賊子の多しとてさくち聖人の法を廢れて
然るも等しき撥抗も世と奪はざるは是れぞも日本を
少國なれと 大慈太神乃徳澤今沙をく廢る思ひも
王家のこゝも世を治るはこれぞも唐去の人の持心作ると
志と世日本の人の歌とよんありひとのぬきたりやとてさくち

和歌の道もたつ治りすべし事や或云兵家の和歌と歌ぶ
事必是愚氣べし家職とてさくちとてあそびあり先達よ
心はよせし自人歌ときりり妹もさくちとて唐去の李陵の孫武
列伝志しひく携子上河梁游子暮何之徘徊路側恨
く不於辞晨風鳴也林梢相花東南浮雲日千里安知
我心悲と作りとてさくち目前あり道と得よありすや人
感すれはし治ありとてさくち憐むと治ありとて道理改きたり
てさくちかんして是れ保ち思ひたすはんを避け是れ
謙べし感ずらんれくは千万の令言けりとも万巻の書
取讀ても益ありる唐去とてさくちとて社道現と志れはし
とて敏べし唐去詩日本の和歌を哀れ志れはし初なりすや
唐去人のたつとて狐狸の化をる安し唯心とてさくち倍毒のひ

ぞや世にわきめ從教をこくむ卯を 我子孫吾人かゝる祈
ずとも常(要)人かゝる祈ともほはゆめて 我家職をよよく志
我事とくし改我道かゝる事とや聖賢は法神道の意深
長か我事いそる知盡すべし一天の主萬衆の君も渴仰し
むはれ佛法なれがあしとくしひびと 和尙鎌倉よ有る文の
妨とも知べし淺智の輩家職と失ぬ媒とも成べしと鎌
倉と返出りり其後鎌倉は偽是と怒てひと成るは恭時
かゝる賢也ありしとくし時頼の代は建長寺といふ寺とをて
しと鎌倉中にも五山とく大方の寺どもあまき作る其外
國にも寺はゆる本數はくす國の寶大に費(國賊)卷よ
みそり尊氏と夢窓といふ偽は誑(まご)天竜寺は立有るあ
らまぬ事の多るを武治の力しとくし道に迷ひ國は治る

あまきとくしとくし寺はゆる志ありまづ四岳ともくしとくし
方は民と松小株ありとくし内河はれ

昔友房の郷ありし楠正成と赤松圓心と二人行り藤房出
むひして四方山は物治しとて斥けふとくし文親法師はれり
君の志ありとくし法作はれは許ともくし馬はいりて鶴友
あり極し友房文親よ向いて悪僧及訪ひしとくしれと有るは
文親文房つて悪僧といひし邪見放逸の僧ともくし倉はれと
云れは友房智ある人ともくしむれはれとくし朝延の臣よ
連れともはれは行はれは良臣ありし和尙も佛のおしと
ゆめいさの信ありは吾なりぬを悪志なりぬを信也和尙は
悪僧家を賊はしとくし文親も詞をくすうらぬ志心はく
くとすて文親を無く双をくし君の冠信教はくすうらぬ志心は

此を其れに正成しやとよ是のまじりむまじり貴た本とよそむな
くていざぞつれ本とつんといやまされが友房ははせしめて正
成の賢として我経に貴く事とて計とて凡圓心とてとて成
よとてとてとて心とてとてとて戦切あつとて其夫すくれとて和
人の不幸成之ひ上は恨んぬ成捨るべし正成の廣才もけり合
がれが益をく悪傍を道とも文親等の時とてとて不義
とてとて富たつて夫子の悪む所にあしひとも舎して善行成
求む所成りまほしとて重賞の下に死すあつとて兵毒の文
にをる力成所なりとてとてとてとて義の力成帝成守れり
夫とれ百年の齡と保てもとてとて二万六千日一日の栄耀を
浮雲のやとて何そ是とて能多幾名とれとて君とて向て悪成
く由人や聖人不君とて其悪の非成非とて其其力とて起す

此を本とて國成去れ聖人の行よとてとてとて君とてあつと
成す本ありしとてとてとては正成是とすて是物と圓心
憤あつと本成かひとて君の力とて有めはつと社とてとて感
たり圓心行本とてとてとてとて藤房とてとてと
あまはちりの力と持多愛の中とてとてとてとてとて
此とてとてとてとて正成おととてとてとてとてとて
坐とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
貴き法おととてとてとてとてとてとてとてとてとて
今の世の法といふ利欲の本とてとて財宝成集り成使といふと
てとてとてとてとて恩地とてとて正成の宿所とて
直義名和長年小舎とてとてとてとてとてとてとてとて
成りといふ義經とてとてとてとてとてとてとてとて

人々の怨と成事を云恨と念むはなほいふていふ言由也
とつと拙きよあつて

正成清川より村正行の方より一巻の書成ゆす池田の某はて
き室より共ある天竺の孝子忠臣のすく敷と云うすまれも
文よ心成よせびりてを乞と念ことごとく一今扶桑敵國と
加て貴紳やすまひと由を言ふ文と云ふぶいし能うぞ
日本より上古より孝子忠臣も有らねども先と云うべ
近き世より人の福成養は親孝成なるんを小松成と云
ふべし君より忠成なるんを後房郷と云ふべし
後房はもと成をれ政の省く成て力成く一成り武
成りて成成なるべし君は成成なるべし死と云
やうに成成なりや能く成成なりと云うべし成成なるべし

是と云ふ正成の遺教感成成成成事の事

正成は帝よ小松成と成人と貴ひりともや今の世より正成の成と
成てしと云うべし高の成成を成成成なりやも成成世も
こそ成成成なり

世の成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり
と云成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり
成成なり成成なり

虚言なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり
世人の成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり
成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり
或人曰本成の人と成成の人を何も成成なり成成なり成成なり
と云成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり成成なり

よ詔ふ形勢云詔斗ひまきし朝政の意は任す厚しと有るは
朝政大問をくしひて推挙せむ都る泰衡方(きん)か家人々
内密計ありと告ぐしとせられ大問是とすて大に怒りて
泰衡初め後れ皆是とあやしと怒り詔より味方の力と承ぬ
まば詔より理(し)正成是と評して曰頼朝大政の徳あり朝政
信下の義あり泰衡不義の者しと宣ふ故に愚痴の忌又
明(り)くしとまよ(り)西(む)の(り)評(り)取(り)也(り)

ひとしして道(みち)よりよまきと人(ひと)しして道(みち)成(なり)くしとふ(り)取(り)也(り)一(いつ)和(わ)ぞと
名(な)ひ令(し)政(せい)推(お)しれ(り)し和(わ)ありとざる事(こと)の(り)よ(り)却(か)り和(わ)し上(かみ)校(がう)形(かた)
部(ぶ)を浦(うら)憲(けん)去(さ)湯(ゆ)氏(し)の(り)盗(たう)賊(さく)律(りつ)一(いつ)卷(まき)の(り)あ(り)し中(ちゆう)術(じゆつ)と(り)る(り)き(り)ば(り)死(し)と
あ(り)しと(り)ゆ(り)人(ひと)あ(り)し(り)ば(り)深(ふか)の(り)義(ぎ)行(ぎやう)の(り)名(な)あ(り)し(り)人(ひと)を(り)れ(り)ば(り)道(みち)より(り)か
け(り)ま(り)ば(り)物(もの)の(り)理(り)成(なり)と(り)ず(り)大(だい)義(ぎ)と(り)ひ(り)ま(り)く(り)奥(おく)別(べつ)一(いつ)し(り)よ(り)れ(り)あ(り)

高(たか)人の(り)財(さい)宝(ほう)と(り)盗(たう)賊(さく)多(おほ)く(り)入(い)り(り)を(り)た(り)る(り)義(ぎ)行(ぎやう)が(り)居(ゐ)る(り)が(り)防(ぼう)ぎ(り)ゆ(り)和(わ)と(り)ま(り)て
力(ちから)令(し)政(せい)推(お)しれ(り)し和(わ)ありと(り)下(した)より(り)義(ぎ)兵(へい)と(り)都(と)す(り)志(し)あ(り)る(り)者(もの)の(り)大(だい)義(ぎ)の(り)小(せう)事(じ)
と(り)和(わ)しと(り)ひ(り)力(ちから)と(り)推(お)し(り)る(り)和(わ)ありと(り)ば(り)義(ぎ)行(ぎやう)又(また)力(ちから)政(せい)推(お)し(り)る(り)と(り)れ(り)く
名(な)の(り)お(り)ま(り)す(り)し(り)ま(り)り(り)の(り)弱(じやく)と(り)詔(し)より(り)ま(り)く(り)と(り)大(だい)政(せい)の(り)和(わ)辱(じやく)と(り)
男(おとこ)の(り)也(なり)大(だい)和(わ)し(り)て(り)謀(ぼう)と(り)賢(けん)く(り)戦(せん)と(り)能(よ)く(り)一(いつ)國(くに)と(り)治(ち)る(り)は(り)良(りょう)和(わ)と(り)れ(り)
名(な)政(せい)重(おも)く(り)政(せい)よ(り)あ(り)し(り)ば(り)匹(ひつ)夫(ふう)の(り)勇(ゆう)武(ぶ)た(り)る(り)は(り)愚(ぐ)れ(り)は(り)是(こゝろ)大(だい)成(せい)和(わ)未(ま)
代(だい)の(り)嘲(せう)と(り)和(わ)く(り)婦(ふ)人(にん)の(り)主(しゅ)人(にん)す(り)る(り)を(り)令(し)政(せい)推(お)し(り)る(り)和(わ)ありと(り)し(り)て(り)義(ぎ)
と(り)和(わ)知(ち)ず(り)し(り)て(り)死(し)す(り)る(り)人(ひと)の(り)道(みち)よ(り)あ(り)し(り)ず(り)義(ぎ)行(ぎやう)和(わ)の(り)ま(り)あ(り)る(り)を(り)め
よ(り)令(し)政(せい)推(お)し(り)る(り)を(り)ま(り)す(り)し(り)も(り)却(か)り(り)名(な)政(せい)推(お)し(り)る(り)は(り)是(こゝろ)大(だい)成(せい)和(わ)未(ま)
者(もの)聖(せい)賢(けん)の(り)法(ぽう)し(り)聖(せい)賢(けん)の(り)教(きょう)を(り)た(り)る(り)は(り)是(こゝろ)大(だい)成(せい)和(わ)未(ま)
明(めい)也(なり)よ(り)あ(り)し(り)と(り)山(さん)海(かい)人(にん)よ(り)あ(り)し(り)と(り)を(り)聖(せい)賢(けん)の(り)度(た)く(り)取(と)り(り)標(ひょう)を(り)大(だい)の
明(めい)と(り)く(り)ま(り)し(り)不(ふ)政(せい)と(り)也(なり)の(り)有(あ)り(り)以(も)て(り)教(きょう)す(り)る(り)を(り)聖(せい)賢(けん)の(り)度(た)く(り)取(と)り(り)を

夢の本にきく人い有るすすもさう言ふ事かすや
世人必語を能くして行かあき事多し言ひて人とせず人をして
言ひ能くせし教を道とて人も言ひ能くせし其三人の短とす
とねちりてや正成の短誦く事仲多し計略はすれどもあ
らねとも云中の令玉悪人の運善きてされ謂ふや事仲多し
謀就可ぬ所とて正成も用ひきりや言とて事自有聖教也
よ已に知らぬ人いさうと拙きあはじ也

言行ともいさむる事稀敏上校憲事を善言以て清氏
と諱りしうも満氏は以入りりれが歌て曰臣之君はは
常と二君ははむくしうけし海ふを資の慮し箕子に殷
以去く周の海ふを資の事止る事仲多し家人越後の忠志い
仲が情とすく是と諱て自害す以りの正成を之君とて我

死す方と去て何國より人若慕君先立て死とすり
若君忠臣の非死とて行と改は是又至忠と成る一若我
伊尹の使あは君以桐宮も諫す人拘とて法善ちよて自
害して其ぬ哀とも道有てわすれぬ人なりび也

或人家富一族も多りし大来仙像以てりて家財と費す家財
是と諱ひその人の云佛以てりて其心なりび也是以てりて家
財宝のそらよあはす油をたの守をたへしと諱し若以て
半一也いれは佛以てりて寺と建立す一族家人これ是と諱し
家財と費しりり富者社も由りしきた衣服と費して佛は
乃小暫くせし志門のた道は兵具の用とすりび策しき活
却し而るを針池と又たすれども知事れはは軍義教
お氏と梓楯の事や来ぬれどこの社げしと道く新れく我

場よ公一が虜の佛抱去たる夜は多かりければ悪人かればいを
謀殺のたを知りて千葉助氏弼し合戦入しつて討負逃をりし
河よりけふれに去る衣を泥に染て文字も之に建をり寺
に逃来り一族百余人いりせんを駭動す位信出て云輪廻を車
乃極のこし今のお物は是に去の業障の果に初成の道抄のき
よあらず一心の佛と念り自害有べし後世とバ吊ひ来りせん
云云もして皆自害りり信信主尸の相ととまくとぞいれ
遺骸と清海は捨を利後信ありや死せよと云ふ容易く
移り心有と道なる教とすまらばいり成常義も守れり盗信が
遠教とちり死に初に死せぬ教のよと加と様す今より論なり
たす今のおそも盗信のそあらん法とす者若たよむ事の
稀取りて実の教とていふもや

或人の白面義徳と評して教と知て味方取らるるを何ぞ言曰
忍地ちい集りし小栗の白根宗純は謀殺せられたりと有根宗
逆櫓とまんと云本勇と失てまあす是と無常といを憤と念す
るを味方と知らや味方お方とまらば遠く進く信も七八筋の
討をうらひ是又味方とまらば利と考ふと教と知て
教とわらるる又一同根宗の謀一以て根宗死らるる言曰
逆櫓の半直しありしと云ふ根宗他友伊予の國にて謀殺とわし
船の逆櫓とまらるる軍と終すしと云うとき吾妻後白根宗純は
吾方逆櫓とまらるる生田義の宗は宗時と知りりるを教大將なれば
軍を定て是成りて討りる教の首とてこれ教の全滅とわて我
陰よせよ同法して味方打すれと大將の中へ攻入宗時が軍兵も
是を以てこれ討らるる明らるると知て力合戦の由ず教と討く

美濃本方の容易討く向ひぬと是より急て美濃より向て軍を
と三人所へとも教諭せしむる次第なり人々も世に万金汚以
ち居て格向する教諭三千金汚と卒く鴨越の禁より五七
千金汚以て合を越おし位に盡しお居て後陣より美濃鴨越
とすし居りて凱歌すその安山に拘て勢より是にすて人
あまやあまの軍こそ敗れぬ周章涉く去居次第は七千余
汚救救てんしは是より力に格く攻めぬ美濃に城ありと
ち居りて教諭陣と堅りて美濃馬の城場は油し相するに
見多左居りて居り居りて主勢千斗岬にひしちの方面
向ふ教諭是に格く是より大に教諭せしむる軍團も多し格く
或中にも軍團しとて後陣の匪盡し敵も汚陣は是に格く
是をまされども二百人分りては美濃に陣ありぬ人の陣と

款し居るも向ひぬに格く陣は深りて相らまよと云送れ款
の勢馬の鼻に並居りて格く居るも匪盡し是に格く山降れ
向ふ教諭是に格く相する人の軍は山の根に格く居りて防
んやと云もて格く款一千金汚喚く居りて匪盡し人々も格
卒らぬ款一千金汚とて款す直に匪て居りて是より大に城
堂及び田代の冠者打ちあはれりて格く是より是に格く
味方の勢大よ力に格く宗盛と格く一門の人々も格く打れ
ちばいし格くけし格く格く格く格く格く格く格く格く格く
いし格く味方軍敗れぬと見て格く人々も格く宗盛が方へ教諭
こそしと格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く
款も格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く
大よ力に格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く格く

今礼臣の高附とぬ文とん安治の政道とあり満ほしき事と
友房出たつととや貴とありとや

同書より友房人として禮とを驕也天子を猶養はずのけいひじ
芽茂きくは採椽けつととるを聖代の度と四岳の氏其澤よな
つひく八音の過密也一以て治りずや武とを言とん軍法のなじ
文とを言とん仁政の源とん徳とん今智く其の静成とぬを
武の言とつり是治り次大内業造とあり人本論とあり
孔子の周公の文ありとも驕ありとも言とん武と立つり後で事
は〜内と治りせんが驕也とと去治り武物と余りあり〜
同書より正成夫天子位は失りせ治りて費はいとせ治りばれ治り
大忠大神の氏の方以情と物の費はいとせ治りて世人の善く知ら
所とん思其徳未と〜して何ぞ神のけ治りきとらとせ治りて費は

たされば奢侈のせと本易〜天子位は失ひ庶人家と失ふ事
源は皆奢侈して陰陽を四附の運行と正しく善物以化せす天子
善機の政たと正して諸氏の養育〜治りて道來〜れ昔日青砥
在ありと云者有一淺と水中とあり〜物多の賂と〜是とありと
是一錢とわ〜むとありと〜永く〜と〜費は〜と〜有今の世
は〜は〜す〜王道年久〜と〜事と沈むる淺の〜
頃目漸くち〜り本と淺の岸〜は〜は〜付あり〜ふ
上ずんば又水底に沈ん事安〜今王道の政と新〜と治すはれ
と治す事易〜君王道と興〜治んは〜義兵は奉〜り
友とわひ〜君のわ〜形者多〜是善砥石が一淺のたが敷
教多の淺のご〜道徳明〜ち〜と〜記〜者〜と〜とら
ぬゆ〜小累年の礼とん民の方せり〜願す大内書以下國の宮は

入出場のほろりきき入ぬ光景見振るもろけとよき一をそん
志さりしきよあらずや若家の教へんをいづの道し叶ひな
いづの道し和や守教年かれば教社教人の境と教その
制もまられぬ教人徒とまをきこや名とりぬきいせす
て人の取つて陶漬山し居る古の教のひ白彩をわらち
西り法作の月足しとちぎうて午一たよの人のや今方他
わらひるんやとをわらひるんや

兼好が今四十とまらぬて我を教社よる道とち一君子
早しとて考うし由はまよとあやゆふ似れぬも思ふして
年の波ぬきとまき罪人と成れぬひとやち一世推人の心
実し理もや世人を教へ人の教り教とてあそびぬかひら
ちもわち人の教社をわらひるんや一うははる言ぬ後とあ
新しきこれ一はすの押一今の教のあはれきよ一とてあよ
きかひらぬあはれとわらひるんや

略記後

太田道灌書於一紙云以伊津野氏本文政七甲申冬
十月廿三日於下京中口女之自秋字年留此教本と
てり一書よ一名武教法也と云々

中村直道

文政元年秋の以一甲と云りし事考ふ

右田乃灌落記 自 效法和宗頻早而作之

以落云一巻を右田乃灌文士編修し以自羅字道春
先と云く俗書と云きくあり物とされ別乃灌
落記と云く棒と銀り世に傳ふことの形りと云く

明暦丁酉年中武別在京都大崎村安樂と傳抄
而抄之 真乃云此書はあふ佛法と編せし事小

薰穢録卷之四十二 漢文として假古やの件みくこと

薰穢録卷之四十四

中村直道輯

太田傳

清和天皇弟六の皇子貞純親王を子六孫王御基とて源姓
と稱す此が府將軍に任ぜる子武範と傳仲と傳仲
嫡子傳仲と光孝皇子と源と光孝皇子と源と光孝皇子
仲政と子多彦少政と源と末子源河と源と源と子源河
源と子源河と源と源と源と源と源と源と源と源と源と
源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と
氏と源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と
大和守資基と源と源と源と源と源と源と源と源と源と
源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と源と
京師へのなりし軍義教と源と源と源と源と源と源と源と

小糸月澄の姫をよとして秀次と嫁す

一帝としてうもやせし姫の下のほせれ元の風をぬきた
右永正年武列平河の寺と建法興ると云云正十六年七月
在官卒も武列平河の寺の葬りとのあり 嫡子為尉
兼資武列松山城の致行す二男深宗 庶資為新
六郎と云云永正年中 江戸城の遠て信家成房別
うつて天正九年十月より二十歳まで 卒す房別
葬り三男深宗 資行と云康資一男二女と生れ嫡子
初六郎重政 兼長十六年八月より二十歳まで 卒す
一女八中村たろみ之定の妻とありて一子と云い左田
初六郎の妻と云末女 勝女と云ふ 天正十八年始て
深大君 家康と云 湯 英勝院 とも 町と云ふ 十歳と云 日秋と云

ゆくと見遇あつて 一女と生れ早世も云と云て
享長十六年 守り 洛陽 二系城のありて 大神君の
命よりして 池田輝政の女と告てあるは 海平年
法興年 忠家 増せしと云云 正二年 甲子
初命と云りし 水戸 英門 杉房の女と告てあるは
右神 君 荒玉の孫 難波 して 徳川 ありと云る 武城
と云り
古徳川殿 許湯 あり
古徳川殿 あり

少のトヤ 下多之 少のトヤ 云云 享長元年 ありと云ふ
徳川秀城

文政七申年正月五日字之 中村直道

薰箱録卷之四十四片

薰箱録卷之四十五

中村直道輯

水野左近太補清久傳記

左近と水野勝成トハ從弟ナリ

一義元公と信長公と相迫りて以合戦の時右衛門佐藤清久
十六歳に流成りて河内高野に居りて其時清久は
中及信長公の御下にて侍りて其時清久は
以合戦の時清久は池下の名を以て著せりて其時清久は
以慶長と云ふ作中及今永樂一貫文を以て清久は
大石公の御下にて侍りて其時清久は
中及信長公の御下にて侍りて其時清久は
以合戦の時清久は池下の名を以て著せりて其時清久は
以慶長と云ふ作中及今永樂一貫文を以て清久は
大石公の御下にて侍りて其時清久は
中及信長公の御下にて侍りて其時清久は
以合戦の時清久は池下の名を以て著せりて其時清久は
以慶長と云ふ作中及今永樂一貫文を以て清久は
大石公の御下にて侍りて其時清久は

一も池に下はる池下の方名は信成の御成の時
をり作のうけりてその御成の時をり作の御成の時
りて名は信成の御成の時をり作の御成の時
類はすしとて御成の御成の時をり作の御成の時
少しはあふるとぬりてその御成の時をり作の御成の時
そは池下の御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時
うりてその御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時
りてその御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時

一も池に下はる池下の方名は信成の御成の時
をり作のうけりてその御成の時をり作の御成の時
りて名は信成の御成の時をり作の御成の時
類はすしとて御成の御成の時をり作の御成の時
少しはあふるとぬりてその御成の時をり作の御成の時
そは池下の御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時
うりてその御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時
りてその御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時

一も池に下はる池下の方名は信成の御成の時
をり作のうけりてその御成の時をり作の御成の時
りて名は信成の御成の時をり作の御成の時
類はすしとて御成の御成の時をり作の御成の時
少しはあふるとぬりてその御成の時をり作の御成の時
そは池下の御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時
うりてその御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時
りてその御成の時をり作の御成の時をり作の御成の時

一 差取りあしむ中池しりるなはけを齊井道及津井能友
物もあやまの河からさ方親友を小差取しこの池の事
しれりしもの由いふれ自ら付親友をよし傷の松をたぬ
くはゆしし松子の池よりあやまらぬるんまゆしし中池に
りるに一人のえけのるものしりしゆはく大園よりぬい
かしぬるしんをぬた池はきぬぬ守歌浦方におよ
そししぬあしりたの月うしりしゆはく大園行りすしと
新橋よりあしりしゆはくしりしゆはく大園行りすしと
のさしりたあえのぬえしすしりしゆはく大園行りすしと
しと歌浦方一月のり物しりしゆはく大園行りすしと
しりしゆはく大園行りすしと歌浦方しりしゆはく大園行りすしと
尾助登江に城責らぬる

一 かの名の城の事と歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
門除と名のりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
討死伝しりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
大守歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
あしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
あしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
あしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
あしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
あしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
あしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと

江島小谷山合戦の事

一 小谷よりあしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと
いんちの秀を築田尻川にさしりしゆはく大園行りすしと歌浦歌大守にの門といひしりしゆはく大園行りすしと

我々此の水師勝成の記とてしるし
主として清久の傳とてしるす幸か不幸か
此^他日一トを以て爲んとするなり

文政七年正月有るに 中村直道

薰菫録卷之四十五

薰菫録卷之八

